

国史跡博多遺跡指定記念シンポジウム

博多と日宋貿易

日時 2024年 8月3日(土) 13:30~17:00
会場 福岡市博物館講堂
主催 福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課

はじめに

博多区上川端町の旧冷泉小学校跡地で発見された石積遺構は、令和6年2月21日、国史跡「博多遺跡」として指定されました。遺構は11世紀後半、国内唯一の貿易拠点となった博多の港湾施設で、中世の国際貿易都市博多の起点となるものです。

本シンポジウムは、博多遺跡の国史跡指定を記念したもので、日宋貿易の拠点となった国際貿易都市博多の発展に関して、発掘調査の成果、文献資料の研究を通じて考えていきます。

プログラム

- 13:30～13:40 開会行事
- 13:40～14:20 基調報告1 「石積遺構の発掘調査について」
大庭康時(福岡市埋蔵文化財課)
- 14:20～15:00 基調報告2 「硫黄流通史研究からみた石積遺構の歴史的価値」
山内晋次(神戸女子大学文学部教授)
- 15:00～15:15 休憩
- 15:15～15:55 基調報告3 「日宋貿易と博多の港」
佐伯弘次(九州大学名誉教授)
- 15:55～16:00 休憩
- 16:00～16:50 討論「博多と日宋貿易」
登壇者 大庭康時 山内晋次 佐伯弘次
司会 伊藤幸司(九州大学比較社会文化研究院教授)
- 16:50～ 閉会行事

目次

基調報告1 「石積遺構の発掘調査について」	大庭康時(福岡市埋蔵文化財課)	1
基調報告2 「硫黄流通史研究からみた石積遺構の歴史的価値」	山内晋次(神戸女子大学文学部教授)	11
基調報告3 「日宋貿易と博多の港」	佐伯弘次(九州大学名誉教授)	15

国史跡『博多遺跡』の調査

大庭康時

1 はじめに

(1) 史跡『博多遺跡』って何！

文化庁によれば（答申より）

「福岡県福岡市博多区に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である博多遺跡群のひとつで、中世の港湾に係る遺跡を指す。

（中略）

鴻臚館に代わる新たな施設として 11 世紀後半に造られた港湾施設で、中世のアジア規模での取引の内容やその担い手を示す重要な遺跡である。」

(2) 博多のルーツ

鴻臚館 赤坂山に築かれた古代の対外公館⇒ 外交・軍事のかなめ

10 世紀以降 外交から貿易へ

11 世紀中頃 鴻臚館廃絶 → 博多の登場

中世都市博多の出発点は「港」、それも対外貿易の拠点港湾

(3) 港湾としての博多

対外貿易の窓口 6c. 那の津の官家

→ 7c. 後半～ 筑紫館・鴻臚館

遣隋使・遣唐使・遣新羅使

新羅商人・唐～宋商人

→ 11c. 後半～ 博多

宋・元・明・高麗・朝鮮・琉球

・東南アジア・欧州

2 港湾遺構の発見

(1) 博多遺跡群 221 次調査

旧冷泉小学校跡地の発掘調査 2018 年 4 月～2022 年 3 月

調査区を南北に横断して石積遺構⇒立地から水際の護岸遺構

3 博多遺跡群第 221 次調査の石積遺構

(1) 立地

博多遺跡群の西辺 砂丘の末端

博多湾に対しては沖浜砂丘がバリア

後背湿地に流入する河川の右岸、河口部の内側

(2) 構造

延長 67m以上、幅 1.2~1.6m、高さ 0.4~0.6m。ほぼ一直線に伸びる

水際側を二段から四段の石垣状に、垂直に積み上げる

陸側には直線的に石を並べ、間に石を敷き詰める＝上面は敷石状

中程に開口部 = 出入口

砂丘前面の河川堆積層に構築、

石垣前面に溝、+溝の中に木杭→崩落防止の土留め構造か？

石積の前面、水域に向かっては緩斜面、石積から 6mほどで波打ち際

石積の背面には顕著な遺構はなく、整地を伴って平坦面が続く＝広場

石積遺構の南部分では砂丘が迫っていて、盛り上がる

(3) 年代

出土遺物から 石積遺構に入り込んだ遺物 11 世紀後半～12 世紀前半

石積以前の包含層 11 世紀後半以前

石積遺構前面の洪水堆積層 12 世紀中ごろの堆積

⇒ 11 世紀後半に構築、12 中頃の洪水で機能停止

4 石積遺構の性格

(1) 調査所見

水域に対する強い区画性

水際に接していない → 平時の護岸ではない

船の接岸は不可能 博多湾は浅くて、喫水の深い外洋船は沖合に停泊

→ はしけで往来

後背空間の造成 何もない広場 → 荷上場 (+倉庫)

後背砂丘部の利用 施設の存在 → 港湾管理施設

(2) 出土遺物から

越州窯系青磁Ⅲ類の大量出土 ⇒ 中世博多に先行する貿易拠点

土師器と瓦器 豊前型土師器椀・防長系土師器椀の出土

若干の吉備系土師器椀

楠葉型瓦器(畿内産)の大量出土

硫黄の出土 対宋輸出品 火薬原料

硫黄同位体比分析→薩摩硫黄島、可能性として豊後

平家物語の俊寛説話→南島との交易路の復元

九州西岸—薩摩半島西岸—奄美

⇒ 国内流通の結節点

☆ 対外貿易における荷揚げ場所を区画し特定する（海からの視認）ための遺構

☆ 貨物の管理空間を区画 → 保税區

☆ 国内に例を見ない石積技術 類例 寧波 鄞江鎮碼頭遺跡
温州 朔門古港遺跡

中国系技術による築造 → 大宰府の指示により宋商人が構築

☆ 国内流通路との結節（豊前タイプの土師器椀、吉備系土師器椀、楠葉型瓦器椀、薩摩硫黄島産の硫黄、（豊後産の硫黄））

5 まとめ 博多遺跡群第221次調査出土の石積遺構の評価

中世日本最初にして最大の国際貿易港の遺構

初源は古代にさかのぼり、鴻臚館から国内流通に乗り継ぐ港

鴻臚館廃絶を受けて宋の技術導入で港湾整備

対外貿易と国内流通が結節する港湾

日本の境界としての機能 「疫病は外つ国から」 疫を祓う

参考文献

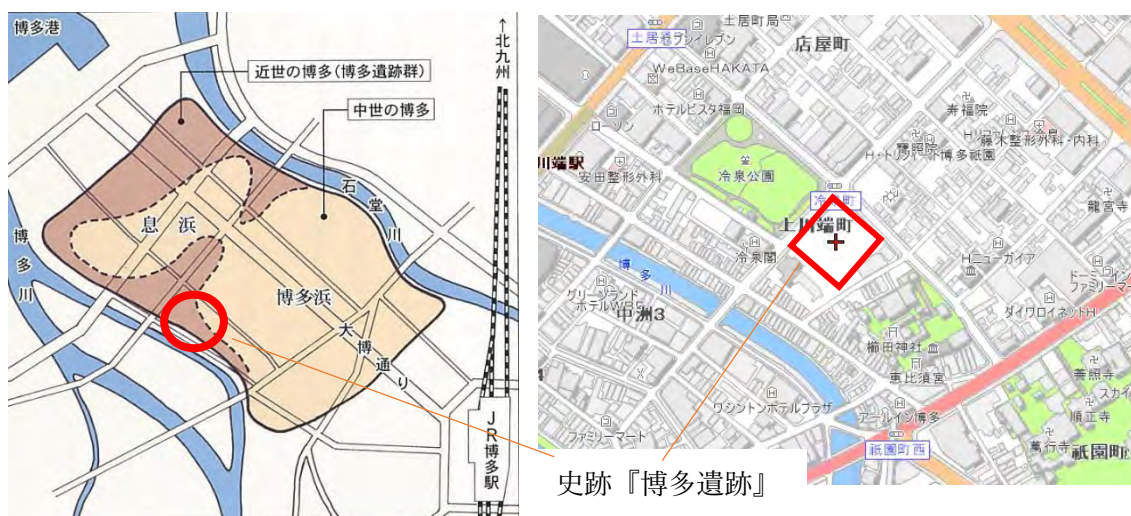
許超・劉恒武 2018 「寧波地区歴史時期碼頭遺址的考古学研究」『東方博物』第67輯

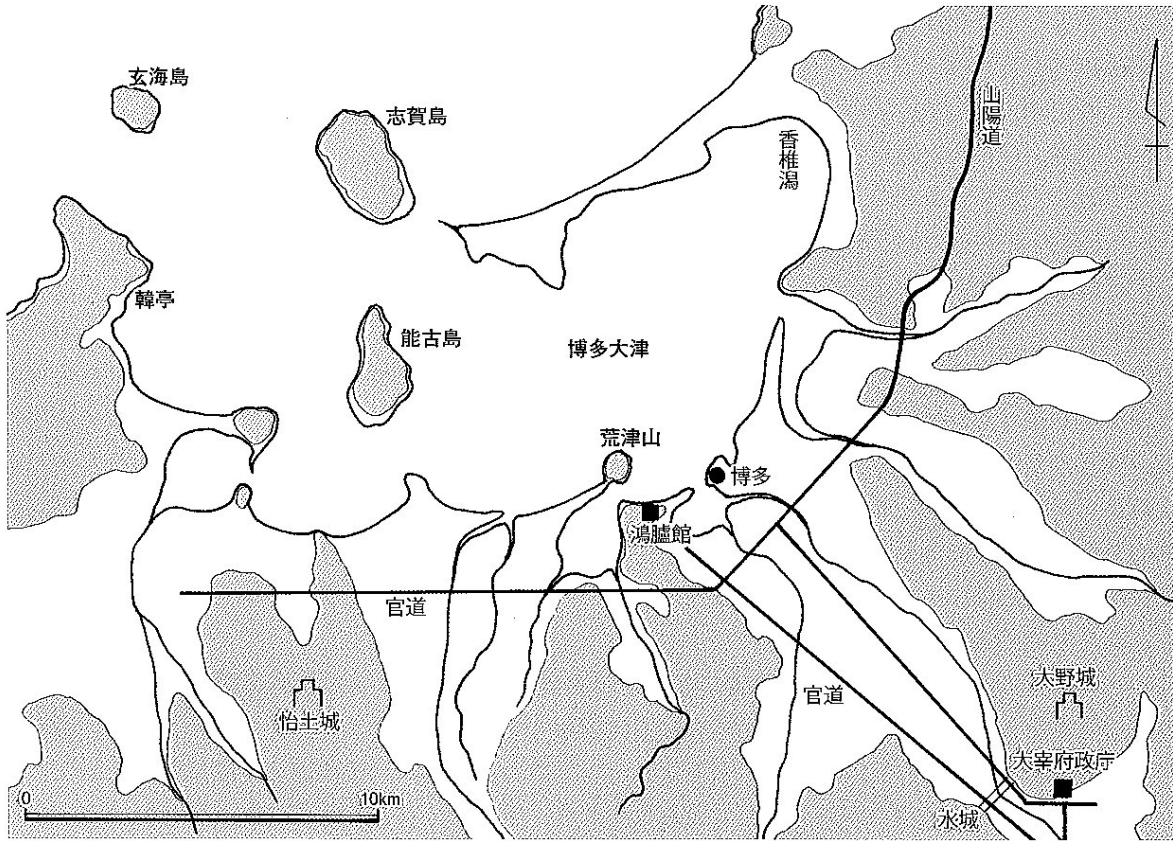
佐伯弘次 2003 『日本の中世9 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社

山内晋次 2003 『奈良平安期の日本と東アジア』吉川弘文館

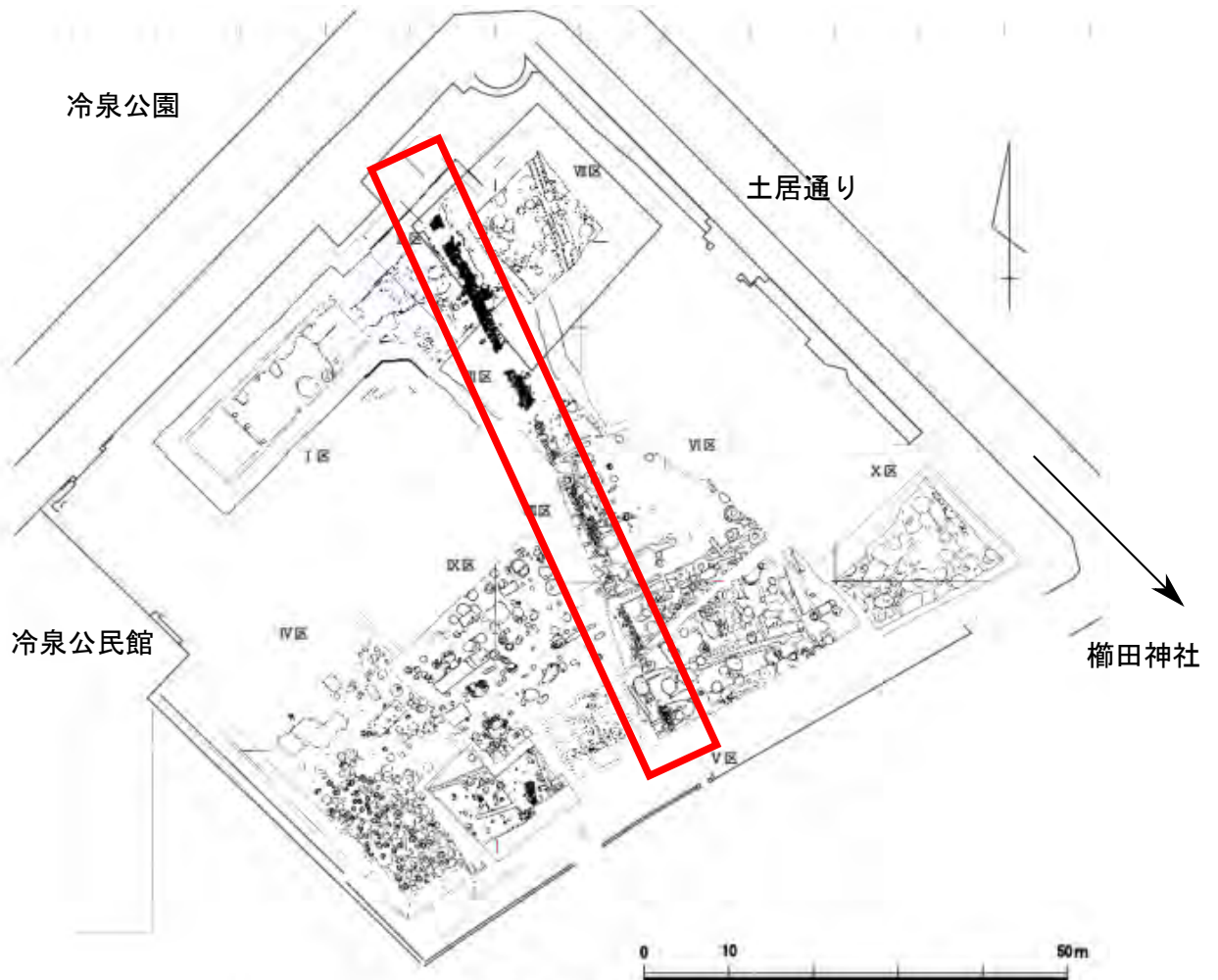
福岡市教育委員会 2023 『博多津』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1468集

福岡市教育委員会





大宰府・鴻臚館・博多

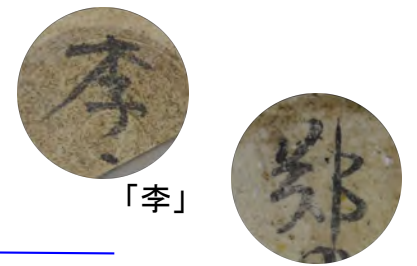


221次調査全体図



221次調査出土越州窯系青磁皿類

鴻臚館最終段階の輸入磁器



中国商人の姓を記した
墨書陶磁器



パスパ文字遺物
62次調査ほか



大乘寺銘の軒丸瓦

港湾都市・貿易都市「博多」の出発点

11世紀後半 鴻臚館から博多に
貿易拠点が移動

11世紀末 博多に多数の宋人が
居住

12世紀前半 「博多津唐房」が形成
=日本最初のチャイナタウン

13世紀前半 謝国明、櫛田付近に居住

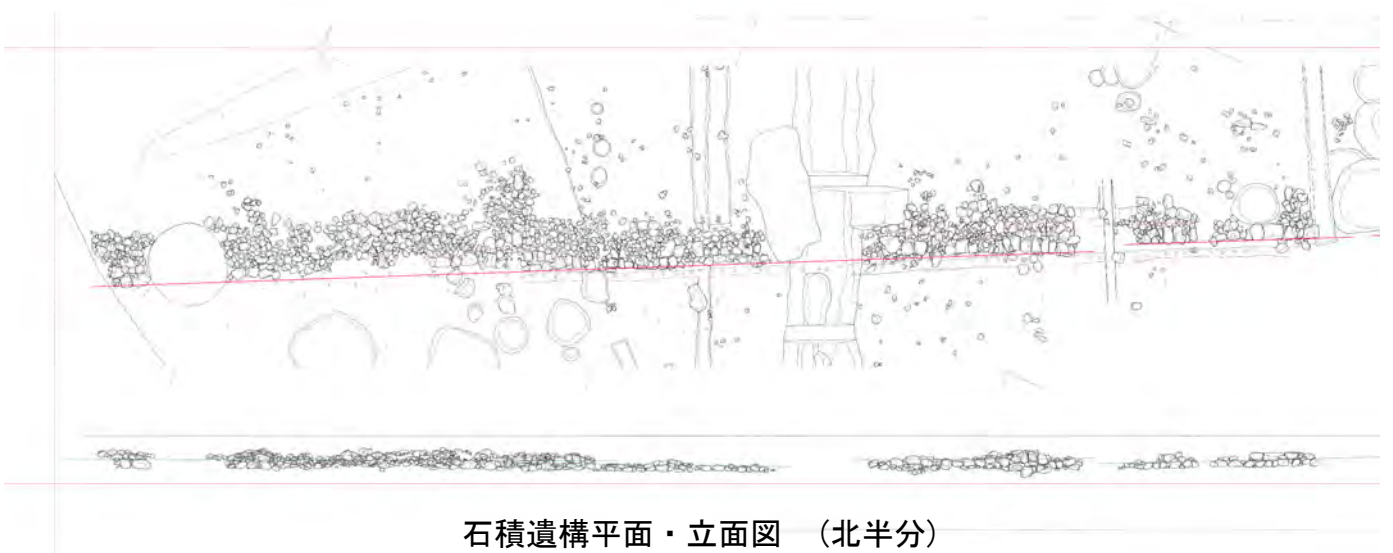
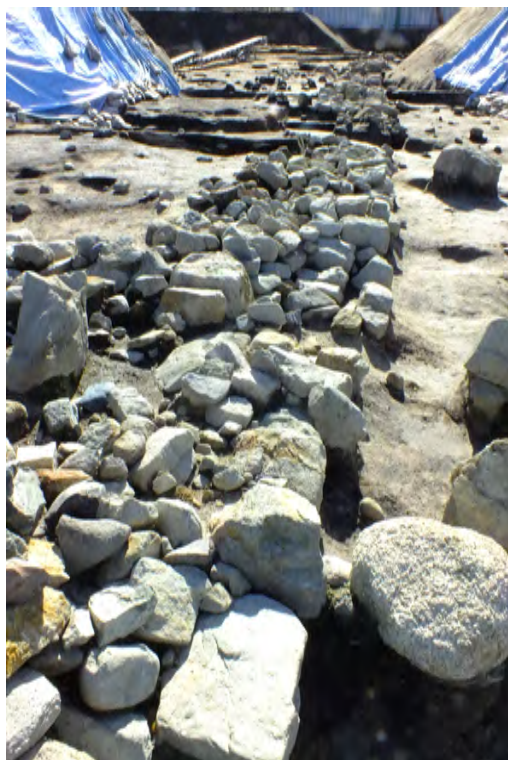
モンゴル襲来

13世紀末頃 大乘寺創建

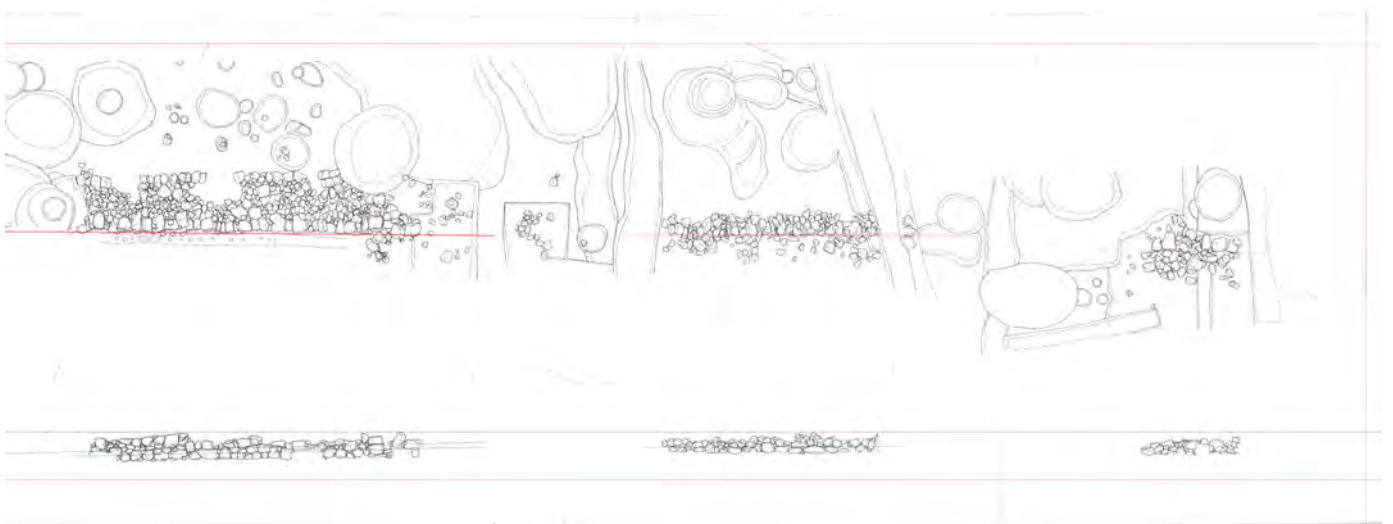
各地に貿易拠点が出現
肥前 高瀬
薩摩 坊津
など

日宋貿易
日本唯一の
公的港湾都市

日元貿易
港湾機能の移動
息浜(須崎付近)へ



石積遺構平面・立面図（北半分）



石積遺構平面・立面図（南半分）



蘇民将来子孫

木簡 蘇民将来符



木製模造船
⇒博多湾を往来した「はしけ」



南無大悲観世音

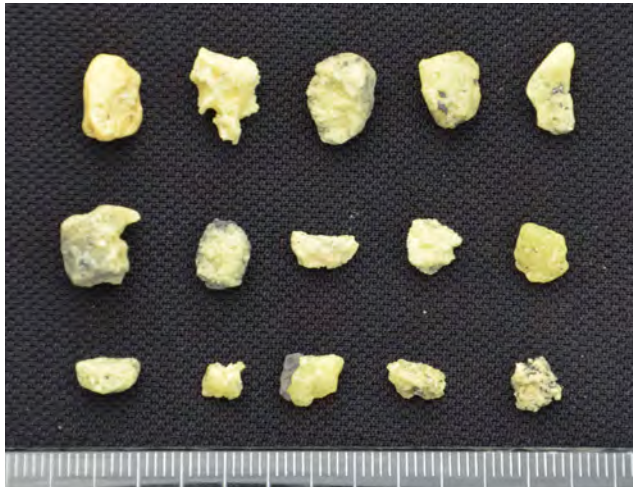
木簡 観音菩薩符



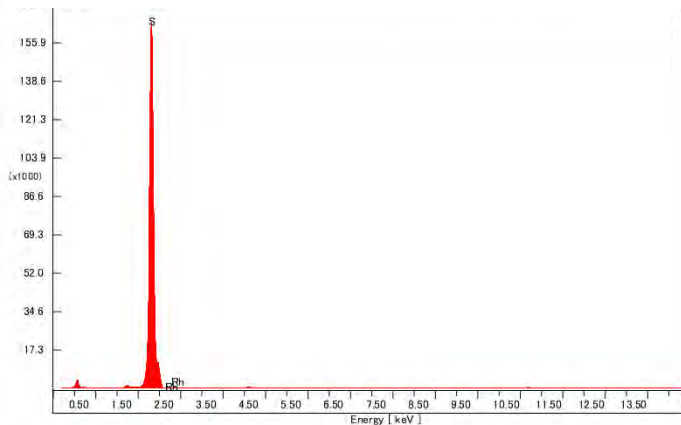
木簡 呪符



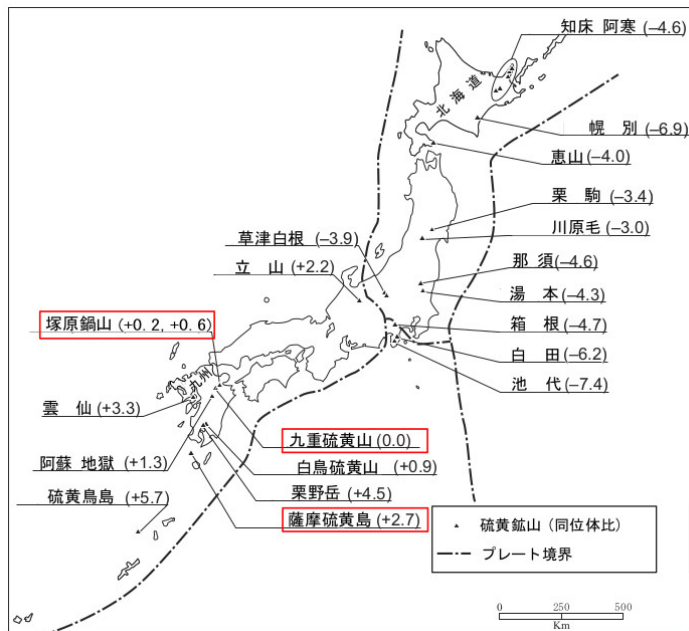
通事楊



出土した硫黄の一部



硫黄の蛍光X線分析結果



試料ID	$\delta^{34}\text{S}$ (‰)	鉱山比定
S-01	-0.5	九重硫黄山
S-02	0.7	塚原鍋山
S-03	0.9	塚原鍋山
S-04	0.7	塚原鍋山
S-05	2.2	薩摩硫黄島
S-06	-1.2	九重硫黄山
S-07	2.8	薩摩硫黄島
S-08	0.8	塚原鍋山
S-09	2.7	薩摩硫黄島
S-10	1.8	?
S-11	3.2	薩摩硫黄島
S-12	2.3	薩摩硫黄島
S-13	-0.2	九重硫黄山
S-14	1.5	?
S-15	0.8	塚原鍋山
S-16	3.9	?
S-17	-1.3	九重硫黄山
S-18	4.2	?
S-19	0.9	塚原鍋山
S-24	2.3	薩摩硫黄島
S-32	0.9	塚原鍋山
S-38	2.7	薩摩硫黄島
S-42	0.8	塚原鍋山
S-45	-1.1	九重硫黄山
S-46	2.2	薩摩硫黄島
S-47	1	?
S-48	1.9	?
S-49	0.8	塚原鍋山
S-50	-1.4	九重硫黄山
S-51	-0.5	九重硫黄山
S-53	2.3	薩摩硫黄島
S-55	-1	九重硫黄山
S-56	-0.1	九重硫黄山
S-57	-0.3	九重硫黄山
S-58	1.4	?
S-58-2	2.2	薩摩硫黄島
S-58-3	2.2	薩摩硫黄島
S-59-1	1.1	?
S-59-2	0.6	塚原鍋山
S-60	0.2	塚原鍋山
S-61	0.2	塚原鍋山



16世紀の博多の港湾遺構（博多遺跡群第89次調査 博多リバレイン）



16世紀の博多の港湾遺構（博多遺跡群第96次調査 博多座）



寧波市鄞江鎮碼頭遺址（宋～元）

国史跡博多遺跡指定記念シンポジウム「博多と日宋貿易」

硫黄流通史研究からみた博多津石積遺構の歴史的価値

神戸女子大学 山内晋次

はじめに

- ◆2018年
- ◆旧冷泉小学校跡地
- ◆港湾石積遺構の発見（全長70m以上）
- ◆11c後半～12c前半に使用
- ◆「唐房(坊)」推定地に隣接
- ◆大宰府主導の大規模な港湾整備？
- ◆硫黄塊(日宋貿易の輸出品)の出土 → 鹿児島硫黄島産と判明
- ★ 日宋貿易の「現場」の発見 ⇒ 【今日の報告】硫黄流通史研究からみた博多津石積遺構の歴史的価値の検討

1. 古代日本での硫黄の産出と利用

◆<東国の硫黄>から<九州の硫黄>へ

【飛鳥・奈良～平安前期】(六国史・『延喜式』など)

相模・信濃・下野・陸奥・肥前などで産出する<東国の硫黄>

→ 中央政府に貢上されて薬剂(ヒト・ウマ)として利用 *藤原宮跡出土の付札木簡・硫黄塊

【平安中期(10c末)～】

・『本草和名』(10c前半)「大宰」での産出

・<九州の硫黄>の中国への輸出(日宋貿易)

◆主要硫黄産地の変化の理由

- 7・8c 東国産の硫黄を天皇に貢納(産地→陸路→都)

↓

- 9c～ 新羅・唐・呉越海商の博多来航 → 貿易の開始・発展

↓

- 10c末～ 日宋貿易による九州産硫黄の輸出(第2章で輸出開始理由)

⇒ 中国海商による九州沿海での火山島(硫黄産地)の発見

・商品としての九州産硫黄の認識(貫休『禅月集』?『宋史』日本国伝)

・貿易港博多への輸送コスト(九州産=短い海路 ⇔ 東国産=長い陸路+海路)

2. 火薬・火器の発明・発達と日本

◆火薬の発明と火器の発達

【9c】中国で火薬=黒色火薬(硝石 + 硫黄 + 木炭粉)発明

【10c】武器への転用 → 宋代の火器の発達

【11・12c】遼・金への技術流出(まだ中国王朝とその近隣に限定)

【13・14c】アジア各地への伝播 → 各地で自前の火薬製造

★宋(10c 後半)～ 火薬・火器の使用増大 → 中国で硫黄需要拡大
⇒ ただ、中国での硫黄自給には困難な問題が……

◆宋代中国での硫黄の入手方法

- ①硫化鉱物（黄鉄鉱など）から抽出の硫黄
- ②火山由来の硫黄（自然硫黄）

→ ①の生産量には限界あり → ②もあわせて需要を満たす必要 → しかし②にも厳しい限界が……

◆宋代中国における硫黄確保と日本

- 火山分布ほとんどなし → 多量の自然硫黄の入手困難

↓

- 火薬・火器の利用拡大による硫黄需要の増大

⇒ 火薬原料硫黄の国内自給不可能（硝石は自給可能）

⇒ 火山大国（＝硫黄大国）日本への注目

- ・ 10c 末～ 日宋貿易（貿易船で一挙・大量）による日本産硫黄輸出の開始
- ・ 中国でおもに火薬原料として使用
- ・ 日元貿易(13c 末～14c 前半)、日明貿易（14c 後半～16c 半ば）でも輸出
- ・ 日本＝国際的に重要な硫黄産地に

3. 輸出硫黄の産地としての硫黄島

- 鹿児島県鹿児島郡三島村
- 薩摩半島南端より約 40km
- 鹿児島港より村営フェリーで約 4 時間
- 周囲 19.1km
- 人口 123 人（2024/5/1）
- 硫黄岳（活火山・704m）

◆火山列島としての薩南諸島

- フィリピン海プレートと ユーラシアプレートの衝突
- 大規模な火山列
- 現在も活発な火山活動

◆『平家物語』（延慶本）にみえる硫黄島説話と硫黄交易

鹿ヶ谷事件(1177) → 俊寛・藤原成経・平康頼の油(硫)黄島配流 → 成経・康頼の赦免・帰京、俊寛足摺
→ 有王丸の来島

- 鬼界嶋ハ異名也、惣名ヲバ流黄嶋(いわうのしま)トゾ申ケル
 - 端五嶋(くちいつしま)ノ中ニ流黄ノ出ル嶋々ヲバ、油黄ノ嶋ト名付タリ
 - 嶋ノ中ニ高キ山アリ、嶺ニハ火モヘ麓ニハ雨降テ、雷鳴事隙ナケレバ
- ⇒ 硫黄を産出する火山島の描写
- (俊寛は)身ノカノアリシ程ハ、此山ノ峯ニ上リテ流黄ト云物ヲ取テ、九国地ヘ通フ商人ノ船ノ着タルニトラセテ日ヲ送キ
 - 僧都ニヲシエラレテ、(有王丸も)山ノ峯ニ上テ流黄ヲ取テ、商人ノ舟ノヨリタルニ是ヲアキナヒ
 - 端嶋ノ浦人共ガ、流黄ホリニ時々渡ル事ノアレバ
 - (硫黄島の中の)流黄津(いわうのつ)ト云所ヘ移ニケリ
- ⇒ 商品としての硫黄の採取と島外商人との硫黄交易

◆『平家物語』からみた硫黄島産硫黄の流通ルート仮説

- 硫黄島での流人3人の生活 肥前国加世庄 → 硫黄島ルートでの衣食供給
- 成経・康頼の帰京ルート 硫黄島 → 加世庄 → 浦伝島伝 → 備前国児島
⇒ 硫黄島 → (九州西・北岸航路) → 博多(日宋貿易拠点)、宋海商船搭載(今回発見の硫黄塊) → 宋

4. アジアにまたがる<硫黄の道>

◆火薬原料資源の偏在

⇒ 硫黄・硝石の広域交易ネットワーク<硫黄の道>の形成

◆宋代における<硫黄の道>の形成

▲朝鮮半島から宋への硫黄流入

- 朝鮮半島にほとんど火山分布なし → 自然硫黄の産出限定的
- 中国史書に高麗国王から宋皇帝への(少量の?)硫黄貢上記録

▲東南アジアから宋へ硫黄流入

- 東南アジア島嶼部に多数の火山
- 中国史書に閩婆国(インドネシア・ジャワ島)から硫黄の輸入記録

▲西アジアから宋への硫黄流入

- 東アフリカ・アラビア半島・ペルシア湾北岸に多数の火山
- ペルシア詩人・サアディー『薔薇園』(13c)の記述
ペルシア産の硫黄を支那へ持って参りたい。支那では値がよいということである
(ペルシア湾・キーシュ島の老商人の言葉)

●イエメン・ラスール朝の税関記録(13c)

ムスリム海商

紅海地域 → アデン港 → インドに輸出された硫黄 → さらに中国へ?

★宋代(10c後半~13c後半)~

中国が海のルートを通じてアジアの東西から硫黄を吸収 ⇒ アジアをまたぐ硫黄流通網<硫黄の道>の形成

★11~13c頃の<硫黄の道>のかたち

= 一極集中(単核) ⇔ 中国王朝(宋)による火薬・火器技術の独占

おわりに

★軍需物資(火薬原料)としての日本列島産硫黄の継続的輸出

⇒ アジアにまたがる<硫黄の道>を媒介として「日本史」は「アジア史」と確実に連動

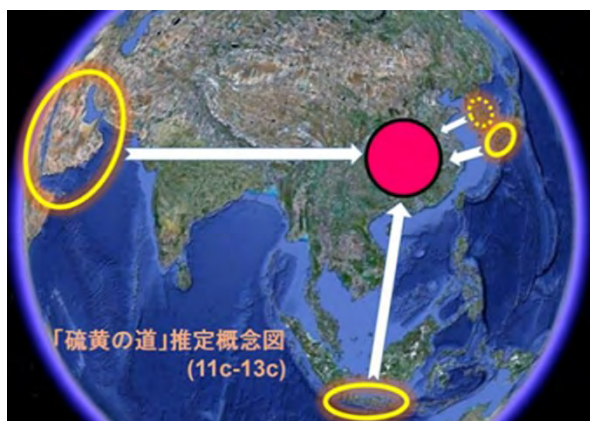
★博多津石積遺構は<硫黄の道>の東端に位置し、その流通システムを支えていた

★14c頃の<硫黄の道>の大きな変化(仮説)

- アジア各地への火薬・火器技術の広がり
- 複数の新たな流入先
- 流通ルートの枝分かれ *この時期の硫黄塊の発見が課題(16c堺など)
⇒ 流通ルートの多核(多極)化・複雑化

【参考文献】

- 山内晋次 『日宋貿易と「硫黄の道」』山川出版社、2009（2022の1版4刷が最新の情報）
- 山内晋次 「東アジア海域論」大津透他編『岩波講座日本歴史 20 地域論』岩波書店、2014
- 山内晋次 「海を渡る硫黄—14～16世紀前半の東アジア海域」鈴木英明編『中国社会研究叢書 21世紀「大国」の実態と展望 7 東アジア海域から眺望する世界史—ネットワークと海域』明石書店、2019
- 山内晋次 「日本列島の硫黄とアジアにおける「硫黄の道」」鹿毛敏夫編『硫黄と銀の室町・戦国』思文閣出版、2021
- 山内晋次 「火薬原料—硫黄流通からみた—一〜一六世紀のユーラシア—」桃木至朗編『MINERVA 世界史叢書 5 ものがつなぐ世界史』ミネルヴァ書房、2021
- 山内晋次 「日宋・日元貿易期における「南島路」と硫黄交易」『国立歴史民俗博物館研究報告』223、2021
- 山内晋次 「硫黄流通史研究からみた博多港湾石積遺構の歴史的価値」大庭康時編『博多津 博多191—博多遺跡群 第221次調査出土の石積遺構—（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1468集）』福岡市教育委員会、2023
- 山内晋次 「硫黄流通史研究から「アジア史」「世界史」は描けるか？」『史学研究』318、2024



シンポジウム「博多と日宋貿易」 2024.8.3

日宋貿易と博多の港

佐伯弘次

はじめに

- ・博多遺跡群の発掘調査；1977年～
- ・博多研究会；第1回＝1990年5月／会誌第1号＝1992年7月

1. 日宋貿易の推移と博多

(1) 鴻臚館から博多へ

- ・11世紀半ば、鴻臚館が廃絶 →11世紀後半、博多遺跡群の遺構・遺物が激増する
- ・森克己説（11世紀荘園内密貿易説）への批判 →大宰府の貿易管理は継続

(2) 唐房と博多綱首

①唐房（唐坊・唐防）の形成

②博多綱首の登場

- ・張光安（博多船頭・大山寺神人・通事）
- ・謝国明（綱首・船頭・承天寺の建立）

2. 中世の博多の港

(1) 従来の考え方

- ・ 近世初頭の紀行文
- ・ 近世地誌
- ・ 「博多古図」

(2) 学際的研究の成果（遺跡立地研究会）

- ・ 「埋没地形」という概念
- ・ 博多の3つの砂丘

(3) 港の位置

- ・ 近世絵図
- ・ 発掘調査から（博多89次調査）

(4) 貿易陶磁の集中的出土

- ・ 博多14次調査地点
- ・ 博多56次調査地点
- ・ 博多221次調査地点

おわりに

～今後の課題